國も皇帝も猛將も神の怒氣に觸るゝ時は、風前の燈よりも墓ないものである。萬軍の主エホバ」の讃美は即ち此思想信念を飾なくいひ顯はした聲である、此軍神は公義正道を以て天下萬人を支配する處の道義力――純全の意力である。此道義力に對する義人の態度は恐怖にあらずして、寧ろ畏敬、尊崇となるのである。之を要するに舊約書の神は力の神である、其性質の進化をいへば、始めは造化力、造化力一轉して智力となり、再轉して道義力となり、意志の權威となり、即ち萬有を支配し、萬國を指導し、大軍を指揮する所の靈能と尊崇せられるに至つた。

此道義力の進化が尙其歩武を進め、漸く新約時代に入れば、眞面目を一新し始めたのである。耶蘇基督に至つて此力の實質が最も明白に紹介せられた。此力は最早天變地異の勢力でもない、萬有を經營する智力でもない、萬國を統治する道力でもない、實に墮落界を濟渡する救の力である。ポウロが此福音はユダヤ人を始めギリシヤ人、凡て信ずる者を救はんとの神の大能なればなりと揚言したる力である、又沈淪する者には愚なるもの、我等救はるゝ者には神の力たるなりと斷言したる力である、又神の弱きは人よりも强しといつた、一見弱しと見えて、其實天地を救濟する

力である。此力が基督の人格に由て吾人の間に顯現したのである。吾人は此力について少しく語る必要がある。基督曰く

我なんぢらに告げむ、惡に敵する勿れ、人なんぢの右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉して之に向けよ。人なんぢに一里の公役を强なば之と偕に二里ゆけ。爾に求むる者には與へ、借んとするものを卻る勿れ。（マタイ傳第五章三九―四二）

多くの勇壯なる人は此言を聞いて基督教主義は意氣地ないものである、婦女子の仁であると批難するであろうが、之れはよう考へて見ねばならぬ。人が右の頰を批とき又更に之れに左の頰をむけるといふことは、決して尋常一樣の決心で出來るものではない。その人の罪を宥し、更に己の敵を愛するといふ意氣がなければ、到底實行の出來るものではない。そこには敵の打擊に報ゆる打擊よりも尙一層偉大なる勇氣を要するのである。右の頰をうたれて居るに、反て其左の頰をまで擊たせるといふので、擊れるといふのとは其相違天地も雷ならないのである。擊たれるといふは實に弱い、擊たれるよりは反擊する方が强い、反擊するより遙に强いのは擊たせるのである。打擊に對するに打擊を以てするのは暴を以て暴に報ゆるのである、

物質力を以て物質力に報ゆるのである。之は腕力さへあらば誰にも容易く出來得べきことで、別段感服するに足らない。キリストは斯る拙い方法は汝等之を捨てよと勸められた、暴力を制し不法を責むる力は道義力より大なるものはない。如何なる人にも本心がある、狂人にあらざる以上は其むけられた頰を擊つ勇氣は起らないのである。パウロは其敎友に告ぐるに、

其仇を報ゆる勿れ、爾の仇もし飢なば之に食はせ、若し渴かば之に飲せよ、爾如此するは熱炭を彼の首に積むなり。なんぢ惡に勝るゝ勿れ、善をもて惡に勝つべし。（ローマ書第十二章十九―廿一）

といつたのであるが、まことに本心ある人は善を以て惡に勝つより必勝の方法はない、靈能の前には實に天下敵なしである、仁者は敵なしとは即ち此事である。ヨハネ傳第七章に左の如き記事がある、

爰に奸淫をなせるとき執られし婦ありけるが、學者とパリサイの人これをイエスの所に曳來り群集の中に置きいひける、師よ此婦は奸淫をなしをる時そのまゝ執られし者なり、此の如き者を石にて擊殺すべしとモーセ律法のう

ちに命じたり爾は如何にいふや……イエス身を屈め指にて地に畫り、彼等が切りに問によりイエス起きて之に曰けるは爾曹のうち罪なきものまづ彼を石にうつべしと曰ひ、また身をかゞめて地に畫り、彼等これを聞て其良心に責められ老者をはじめ少者まで一々にいで往き只イエス一人殘る、婦は集の中に立てり、イエス起て婦に曰けるは爾を訟へし者は何處に往きしや、爾の罪を定るものなきか、婦曰けるは主よ誰もなし、耶蘇彼に曰けるは我も爾の罪を定めず、往て再び罪を犯す勿れ。

是れ應さにイエスの精神的道義力が首尾能く彼等頑迷の徒輩を破つたことを證するのみならず、其愛の力は能く淫婦を救ふことが出來たのである。新約の示す力は實に此種の力である。罪惡世界を征服し靈化してゆく力は此種の力でなければならぬ、物力では萬々出來得べきことではない、或は是を是とし非を非とする道義力でも六ケ敷いのである。不義を赦し、不義者を靈化する力は之を責罰する公義の力に勝る。此力を何と名くべきであろう、古人は之を愛といふた、パウロは此愛の妙力を歌ひ、ヨハネは古今を道破して神は即ち愛なりといふた。天上天下愛の力に

優るものはない、絶大の力は實に愛である。ヨハネが神は即ち愛なりといふたのは、最も明に全能を認識したる言である。耶蘇は之に對して父と叫び給ふた。是れ實に愛が其本源の大愛を呼出した言である。基督の神觀は最もよく力の本質を識認したものである。

吾人が基督教は力崇拜の宗教であるといへば、直に反對する人も多かろうと考へられる。因て更に詳に之を説明するの必要があると思ふ。單に力といへば、何人も直ぐに腕力を連想するのであろうが、それは一應尤千萬の事ではあれど、畢竟するに力の價値を知るものが多くないからである。孟子なども力を以て人を服すれば心服はしない、仁を以て人を服すれば即ち心服するといつて、力を輕視して居る、人を心服させようとすれば、力以外のものに頼らねばならぬと主張して居るが、仁は即ち力ではあるまいか、彼は何故に仁の力は干戈の力に優るといはなかつたろうか、眞に遺憾千萬である。陽に虚位の仁義を敬遠して、陰に干戈又は黄金の實力を取ろうと心掛る支那日本の氣風は、全く支那學が力の實價を認めなかつた餘弊と思はれる。基督教は全く之に反して實力を貴重する、虚名の仁義は之を貴重しない、若し

夫れ神より力を取り去らば、神は空名虚位となつて、其神たる實質を失うてしまうのである。彼の眞善美は人間理想の極致である。美に對すれば吾等の心は實に神々しい思を以てみたされる、恍惚として自己を沒し去るに至る、此の如きは實に美の力ではなかろうか、此魔力がないならば、最早美ではない、どうして神の天要素として觀ずることが出來やうか。眞理も亦貴きものである、幾多の哲人は之れに殉じたのである、眞理は決して空理ではない、音もなく香もなき抽象界ではない、眞理は實在である。眞理は哲人をして之に殉ぜしむる力あるのみならず、何に彼に實現して來る力である。若し力にあらざれば、眞理は空理虚名にして貴重すべき價値ないのである。善も亦力である、決して空名ではない、聖人を馬鹿の綽名となし、君子を愚直の隣人と思ひ、善人を阿房の號と考ふるが如きは、力なきの善を想像するからである。善は畏るべく、敬すべく尊ぶべきものである。至善は意志の高調力である、審判の權威と救濟の能力とは善の占有である。眞善美は孰れも力ならざるはない、又三個別々に存在するものではない、歸する所は一個の力に外ならないのである。之が人の智能に觸るれば、眞となり、情に觸るれば美となり、又意志に觸るれば善となる、基

督教の神は眞善美の力に外ならないのである。

力は神の實質である、之を崇拜する基督教が着々其理想を實現し得るは至當の事であろう。キリスト信者にして他迄も其理想を實現せむと努力し、人世の救濟に其力を盡して撓まないのは、全く此の如き神觀を有してをるからである。社會や家庭の上に愈改良進歩を加へ、其面目を一新せんと務むるは、其心裡に偉大なる力の神を自覺するからのことである。世界觀の章に述べたやうに、東洋の考には惡が善に勝つことゝしてをる善の力を認て居ることが少ない。ペルシヤとなれば善と惡との二ッが永久相爭ふかのやうに思ふて居る、反之キリスト教は善の永久勝利を確信する。斯る確信はキリスト教が力の神を自覺して居るからである。キリストがカルヴリ山頭十字架の露と消え給ふた時、多くの人はキリストが遂に世の罪惡に負け給ふたと思ふた、何ぞ計からん、反て之に由て愛の力が證明せられた。故に十字架上の死は耻辱にあらずして、實に光榮であつた。此偉大なる力は即ち神の力との顯現である。吾人の心に活動して、終始吾等を向上せしめつゝあるは、即ち神の力である。此活動の力を措いて、吾々はキリスト教の神を知ることは出來ない。箇人や社會

の活動を離れて識認せられる神は、そが如何に高尚と觀せられるも、一個の抽象的概念に外ならない。概念は神ではない、概念を作り出す力が即ち神である。譬へば日露戰爭の上についていへば、神は孰れに味方し給ふのであるか。神は戰勝國に味方し給ふと判斷して差支ない、强者が勝つて弱者が敗くるは當然のことである。强者は弱者よりもより多く力を有する、是れ其勝つ所以である。神は斷じて亡國の精神ではない、既に神を失ふが故に亡國の悲運に陷るのである。諺に勝てば官軍敗くれば賊といふ、此うちには多くの眞理が含まれて居る。我に物質力と道義力と智能と靈能との充實するものあらば、彼れ露國に勝つこと火を見るよりも明である。戰爭に誇つて彼我の是非曲直を判決することは多分の眞理を有する。蓋し正義は空名にあらずして實力である。

基督教の神觀は之に哲學上の思索を下せば、其研究の結果數多くして枚擧するに遑がない。或は神を無窮といひ、遍在と觀じ、或は不易と論じ、無量と斷ずるなど、何程我腦漿をしぼつても盡ないのである。何れの哲學的神觀をしらべて見ても、苟くもキリスト教である以上は、其研究の結果、神觀の根本心髓はAlmighty God大能の神と

いふことに歸する。神は在さゝる處なしといふも、遍く在り得る力に缺くる處ないといふのである。知らざる處なしといふも神の智力を意味する。神は知らざる所なく在さゝる處なしといふ時には、何時も神の力が空間と時間とに於てゆきわたらぬ處がない、即ち縱横に神の力がみちみちて居るといふのである。結局基督教の神は力である、此力は人間の五官に觸れるときは物力と感ぜられ、知能に現はるれば知惠となり、我が本心に活動し社會の中に活動すれば、即ち公義正道の力となり、更に又吾人の靈性に接するときは即ち愛となる。凡て是等の現象は力の變態に外ならない、同じく神に接する人も其接する所の神の異方面に由て、其人の神觀も亦異ならざるを得ないのである。假へば人によつては奇績を非常に有り難がる、此等の人の感ずる處は物力の神である。又專ら萬有を觀じて神を見んと欲する人は、萬法の有難さを感ずる。道義心に重を置く人は公義正道の神を觀ずる。處が茲に社會人類の救濟を旨とし、犧牲の心に動かされるものは神の愛を悟る此の如く感ずる者の異なるまゝに、神觀も樣々と分れるのである。しかし如何樣に觀じても、力には相違ない。しかも各自の清き情感に於て健き意志に於て此力を直覺するときは、吾人

の衷心に一道の生氣の潑溂としてみち來るを覺ふる、此生氣は即ち神其ものであつて、クリスチャンは之を聖靈といふ、之れがクリスチャンの眞個の元氣である。

力を神と信じ、宇宙を力の顯現と信ずる吾々は、彼の科學者と研究の道連れとなつて、寸毫も衝突を感じない、科學者は專ら物力を研究して居る。物力も力は即ち力に相違なきも吾人をして崇拜の信念を發せしむる力はない、吾人は物力以上の心力を信ずるのである。此心力は目下國家社會家庭を形成しつゝあるを觀る、其理法は物質の理法を以て律すべからざるを知る。科學者は其研究の歩武を此範圍に進むべきである。吾人は現在の國家、社會、家庭を形成しつゝある心力を信ずるのみならず、人類救濟の力、世界靈化の力を信ずる。科學者は更に此境域に入來つて、其研究の鋭利を逞うするをうる。宗教家は力其ものを信じ、科學者は力の理法を信ずる我は活ける愛を信じ、彼は愛の理法を信ずる。彼と我と何處まで同伴するとも、限りなく衝突するの憂なきは、吾人が信じて疑はない所。

教育家たるものは此靈性の力に無限の興味を有して、之を發揮するの方法を講ぜざるべからず。僅に物力の理法に注目して靈性の力を忘れるは、是れ自分自からを

輕蔑するのである。此力を自覺し、此の力を發揮するは敎育家の任務である。吾々人間は物力を有すること比較的少ないのである。物力に於ては常に天地萬有に壓せられて、呻吟しつゝある。吾人の身體は目にも見えない微菌に殺さられるのである。吾が五尺の身體に顯現する力は天地千萬分の一は愚か、殆んど皆無といつてもよい程である。吾人もし物力のみを觀ずれば、蛆蟲と何の相違があろう。然れども若し吾人が心力に思を注ぎ、吾人が靈性の力を觀するときは、吾人は有形の天地よりも遙に大なるものである。吾人は天地を解剖し、萬有を分析し、其由て立つ理法を辨へ、之に號令し之を使役することが出來る。然かも正義公道の力に至つては國家社會を建造することが出來る。國家社會は其實質に於ては有形の天地よりも大なるものである。劇場よりも後者の方が大なるやうに、國家は天地よりも大なるものである。しかも博愛の力に至つては天地を救濟するもの、天地創造の力よりも大なるものである。造物者よりも救世主の方が力の精華を有して居る。是れクリスチャンの神である。こは冥想に由つて見出されるものにあらず、犧牲と献身との靈能に徵すべきもの、故に犧牲と献身との心底に始めて自覺することの出來るものである。グ

リスチャンが十字架上の基督に此神を觀じたるは至當のことゝ思はれる。天地開闢以來顯現し來りたる力は救濟の力を以て至大とする。故に救濟の力は最後の戰勝者である、否常に戰勝者である。古への先知者は此戰勝者を觀て左の如くいふた、

我れ觀しに一匹の白馬を見たり、之に乘る者弓を携ふ、且冕を與へられたり。彼れ常に勝てり、又勝を得んとて出行けり。(約翰默示錄第六章、二節)

之を要するに戰勝の力は基督敎の神である、基督敎の神は死せる抽象的概念にあらずして、活ける力である。

明治三十七年七月四日印刷
明治三十七年七月廿日發行

定價五十五錢
郵稅八錢

不許複製

著者　東京市小石川區久堅町四十五番地　海老名彈正

發行者　東京市本郷區元富士町二番地　日高藤兵衛

印刷者　東京市京橋區日吉町四番地　渡邊爲藏

印刷所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

發行所　東京市本郷區元富士町二　日高有隣堂

有隣堂出版圖書

大賣捌所

東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社

同　神田區表神保町　東京堂

同　神田區表神保町　上田屋

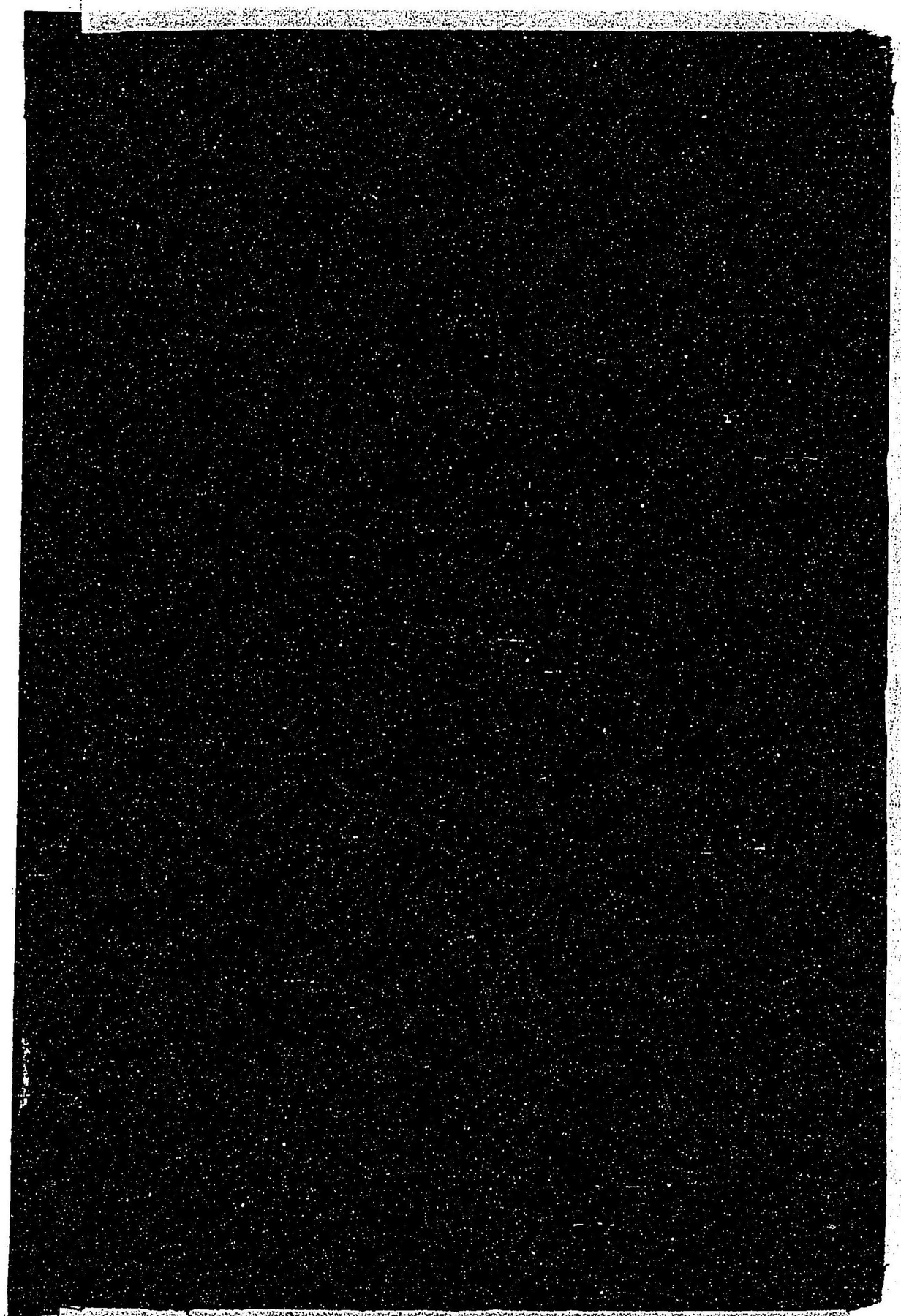
同　日本橋區箔屋町　前川

同　本郷區本郷四丁目　文明堂

京都三條寺町　聖書房

大阪心齋橋南久太郎町角　福音社

45
400



45
400

020706-000-5

45-400

宗教教育観

海老名　弾正／著

M37

ABI-0526